

ご挨拶

佛教大学学長 伊藤 唯 真

万人が願ひ求めるもの、それは「さいわい」であり、このさいわいを「福祉」という。宗教では、生命の危急からの救いや、もつと積極的には生命の繁栄のことを指す。したがって、「いのちの輝き」を期す仏道と福祉の実践とは根源において繋っているのである。

社会の福祉も、社会を構成する最小単位の個々人の心のさいわいの充足から出発し、また社会福祉の実践体系もそこまで掘り下げて行くべきものではないかと、私は思っている。

このような観点から、仏教精神を建学の理念とする本学に社会福祉学科が設置されているのも、またこの学科が仏教学部仏教福祉学科からスタートしたのも、ともに至当のことであった。心のさいわいを根源として、社会的安寧を図る福祉事業の実践人を養成するのが、わが社会福祉学科であった。

この学科の設立の意趣を敷衍し、学問的探索を深め、福祉の実践体系を確立せんとする仏教社会事業研究所が開設されたのが昭和四十七年であった。それよりすでに二十年の歳月が経過し、その間有益な種々

の事業がなされてきた。機関誌『佛教福祉』の発行も当研究所の事業の一環であり、すでに十七号を数えている。佛教福祉に関する理論的研究、実践報告などが満載され、学内はもとより、学外ことに浄土宗寺院にも配布され、『佛教福祉』なる誌名はひろく知られるところとなった。

今回、本学の既設の諸研究所が統廃合され、新構想による佛教大学総合研究所が新設されることになり、佛教社会事業研究所および機関誌『佛教福祉』も名称を消すことになった。しかしこの研究所が果たしてきた研究機能、その領域は新研究所のなかで形をかえて継承されていくことであろう。ひろく親しまれた『佛教福祉』も発行形態はそのままでないにしても、本誌が果たしてきた役割を継承するものが必ずや創生されるであろうことを確信している。